

2022年10月18日

## 長崎県南島原市、南有馬小児童が イオンの里山で環境学習を実施

南島原イオンの里山（長崎県南島原市南有馬町上原植栽地）でリモートセンシング※技術を用いた環境学習が10月18日に行われました。



イオン環境財団では、2020年度より、イオンの森を活用した環境学習として、地域の小中学生が参加する、森の炭素蓄積量調査を実施しています。

児童・生徒は事前学習を経て、リモートセンシング技術で特定した木の高さや幹の太さを実測して記録し、この結果を元に森の炭素蓄積量が算出されます。



※リモートセンシングとは、人工衛星などに搭載した観測機器（センサ）を使い、離れた位置から地球表面などを観測する最先端の技術で、植生、土壌や大気の水分量、地表や海面の温度、地表面の変位など地球環境を把握するためのさまざまな情報を得ることができます。

南有馬小学校の6年生33名が11グループに分かれ、イオンの里山で、樹木の樹高、幹周りを測定し、木の全景や葉、幹のナンバーなどの撮影を実施。各役割を全員がローテーションすることで、実地での学びを深めました。

計測したデータを、タブレット端末に読み込ませることで樹木の体積を求め、炭素の蓄積量の測定を行います。



児童代表あいさつで田中優蘭（たなかゆら）さんは「今回の環境学習を通じて、環境のために白木野に木が植えられていることを知り、木は二酸化炭素を吸う働きや、土砂などを防ぐ働きがあると聞いて、木を切らないでほしいと思いました。鉛筆や紙など環境のことを考えて使おうと思います。二日間、私たちに良い経験をさせていただき、ありがとうございました」と話しました。

今回調査したデータは、一般財団法人リモート・センシング技術センター（RESTEC）が解析を行い、同校で予定されている、事後学習に活用されます。